

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Effects of body mass index on functional outcomes in patients with acute cerebral large vessel occlusion

(超急性期脳主幹動脈閉塞症における機能予後に Body mass index が与える影響)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻

環境病態制御系

臨床研究学 (指導教授 森本 剛)

氏 名 木 下 由 宇

BMI (Body mass index) が超急性脳主幹動脈閉塞, acute cerebral large vessel occlusion (LV0) の転帰に及ぼす影響は明らかではない。本研究では、LV0 患者における BMI と機能的転帰との関連性を検討した。

国内 46 施設の脳卒中センターにおける LV0 患者 2,420 名を含む RESCUE-Japan Registry² の事後解析を行った。患者は BMI (kg/m²) に基づき、低 BMI 群: BMI < 18.5、正常 BMI 群: 18.5 ≤ BMI < 25、高 BMI 群: BMI ≥ 25 の 3 群に分類した。低 BMI 群と高 BMI 群の影響を正常 BMI 群と比較して評価した。主要評価項目は、発症後 90 日における modified Rankin Scale (mRS) 5 or 6 (寝たきり、死亡) とした。副次評価項目は、発症後 90 日における mRS 0~2 (日常生活自立)、発症後 72 時間以内の症候性頭蓋内出血、および無症候性頭蓋内出血の有無とした。

解析対象患者 2,234 名のうち、低 BMI 群、正常 BMI 群、高 BMI 群はそれぞれ 14.5%、63.7%、21.9% を占めた。低 BMI 群の患者は、高齢、女性が多く、病前状態が不良で、症状が重篤であり、内頸動脈または中大脳動脈 M1 segment の閉塞が優位に多かった。低 BMI 群では血栓溶解療法および血管内治療の介入が低かった。mRS 5, 6 は、低 BMI 群、正常 BMI 群、高 BMI 群でそれぞれ 46.4%、31.2%、23.7% であった。低 BMI 群と高 BMI 群の主要アウトカムで正常 BMI 群に対する調整オッズ比 (95%信頼区間) は、それぞれ 1.59 (1.18~2.13)、0.80 (0.60~1.07) であった。低 BMI 群、正常 BMI 群、高 BMI 群における mRS スコア 0~2 の割合は、それぞれ 26.3%、38.8%、41.9% で低 BMI 群および高 BMI 群の mRS スコア 0~2 の調整オッズ比 (95%信頼区間) は、正常 BMI 群と比較してそれぞれ 0.72 (0.53~0.99)、0.83 (0.64~1.06) であった。低 BMI 群および高 BMI 群の症候性頭蓋内出血の調整オッズ比 (95%信頼区間) は、正常 BMI 群と比較してそれぞれ 1.57 (0.84~2.95)、1.31 (0.75~2.29) であった。

急性 LV0 患者において、低 BMI は脳梗塞の重症度および機能的転帰不良と優位に関連していた。